

保健室を出たとき、脚が震えた。

美佐子が麻美を開放したのは、2時間目の授業が終る直前であった。

あれから自分の愛液と尿の染みが出来たベッドの上で、彼女は自ら操るバイブレーターによってマスターベーションを強制され、その姿を、淫らな微笑みを浮べて見詰める美佐子にさらけださされていた。

激しい絶頂の余韻をその身体の中に保ったまま廊下に出た彼女は、その途端は窓際の壁に手を付き、立ち止まってしまった。

まだ膣穴の中には異物感が残り、完全に欲情から醒めきっていない乳首がブラジャーに擦れる。

麻美は瞳を閉じ、深く溜め息を吐いて、火照った身体をなんとかなだめようとする。

まだ授業中である為に、静まり返っている校舎の中に、彼女の吐く息の音だけが微かに響く。

背後から足音がした。

驚きに肩を震わせ、振り返った彼女の目に、平尾の薄笑いを浮かべた顔が写った。

「どうやらお楽しみだったようだな、麻美……」

平尾は、回りに人がいない事を確認してから話しかけてきた。

「……」

麻美がうつむき、平尾の言葉に耐える。

「授業が終わったら、今度はオレがが楽しませてやるよ。まだお前の「前」を味わっていないからな……」

「そんな……。もう今日は許して下さい、身体が……」

平尾がニヤリと笑い、急に伸ばした手で、スカートの上から彼女の尻に触れ、強くつかむ。

逃げようとした麻美の身体を無理矢理に引き寄せて、顔を近づけてくる。脅えたような表情を湛える瞳を、楽しげに覗き込む。

「身体がどうしたって？ まだまだこれからだぜ、お楽しみはな……」

そう言いながら平尾は、小さく折り畳んだ紙切れを彼女の手の中にねじ込んだ。

「オレのマンションの住所だ、今日、6時に来るんだ、分かったか？」

麻美が目を伏せて、諦めたように小さくコクリと肯く。

そんな彼女を見詰める平尾が薄い笑いを残して、背後の保健室へと向かう。

「麻美はどうだった？」

平尾が保健室の中で、事務机に座る美佐子に言った。

美佐子が、つい先程麻美がこの保健室の中で見せた痴態を思い出して、微笑みを浮べる。

「ウフフ……、あの娘、凄く感じていたわ……。バイブでオナニーさせてやったら、最初は嫌がってたけど、途中から腰を振りだして、凄い声……」

「ほう、そうかい、随分と味を覚えるのが早いな……」

「きっと一人でベッドの中で鍛えてるのよ」

「今、外であった時も、まだ身体が火照ってたみたいだったぜ」

「今にヤミツキきになるわ、あの娘……」

「そいつは楽しみな……」

ニヤつく平尾を、微かな嫉妬が入り交じっている瞳で見詰めていた美佐子が、椅子から立ち上がり、近寄っていく。

「ねえ……」

「うん？」

「今夜、あの娘、部屋に呼んだんでしよう？」

「ああ、六時にな……」

「たっぷり仕込んでやってね」

「そのつもりだ、鞭の味を教えこんでやるよ……」

美佐子が淫らな微笑みを浮べ、平尾に身体をすり寄せる。微かな香水の匂いが香り、彼女の身体から醸し出される雌の匂いと混じり合う。

「余裕を持って、いたぶれるようにしておいてあげるわ……」

囁いた美佐子が、平尾の足元に膝を付き、目の前のスポンのファスナーに手をかけて下ろす。

「それに、イヤよ、あの娘ばかりにかまっちゃ……」

「ふふつ、嫉妬か？」

「そうよ。イケナイ？」

半ば冗談のように言った後、彼女は開いたファスナーの狭間から取り出した、また柔らかな陰茎を両手に包み込み、ゆっくりと摩りはじめる。

「ウフフ……」

わずかに頭をもたげだした陰茎に、唇をよせていく彼女の顔を、平尾の手がつかみ、引き寄せ  
る。

「そう言えば、麻美にもこれを仕込まなくっちゃな……」

「……覚えさせたら二人で舐めてあげる……」

陰茎を唇に挟み込んだ彼女が、前後に顔を振りはじめ。赤く塗られた唇に挟まれた陰茎が、固く勃起していく。

亀頭に絡みつき、その張り詰めた表面に押し付けるようにしてくねる赤い舌。

それは貪欲に陰茎を貪り、先端の小孔から滲み出してくる男の粘液を舐めとっていく。

平尾の手が、美佐子の頭を股間に向けて強く引き寄せると、彼女はそれを待ち受けていたように自分から顔を寄せ、深くくわえ込んで喉の奥を突く寸前にまで受け入れた。

表面に節くれたった血管が浮き上がる程に勃起した陰茎の全体を舐めしゃぶる美佐子の舌。

彼女は、唇の端から垂れ落ちようとした唾液をすすり上げ、口の中に流れ出た平尾の粘りと混ぜ合わせ、ゆつくと味わいながら飲み下す。

快樂とそんな彼女の行動に、強い昂ぶりを覚えた平尾が、乱暴な手つきで窄んだ頬をつかみ、上を向かせる。

唾液によって濡れ光っている陰茎を、楽しみに味わう彼女の顔。床から見上げる美佐子は、陰茎をしゃぶる姿を見られることが、さも嬉しいように淫らな笑みで答える。

平尾の腰に触れている彼女の手を、彼がつかみ、大きく上に持ち上げた。

両手を差し上げた格好にされた彼女の、重ねた2つの手首を片手で持った平尾は、もう片方の手で、美佐子の髪の毛をつかむ。

両手の自由を奪われた彼女は、顔だけを前後に揺らして、陰茎を強く吸い上げる。

「くっ……」

先端の敏感な小孔から、内部にわたかまっていた粘液を吸い出された平尾は、その鋭角的な快感に声を漏らし、顔をしかめた。

平尾が、つかんでいる彼女の頭を前後にゆすりはじめる。

舌なめずりの音が保健室に響き、その淫らな音に平尾の荒い息遣いの音と、時折美佐子が上げる興奮の昂ぶりの喘ぎが重なっていく。

美佐子の口の中の陰茎が、ビクリと一度大きく震え、射精寸前に膨れ上がった。

その瞬間、彼女が顔を引く。

口から出た陰茎が、射精の極に中断された快樂に痙攣するなか、彼は股間の奥に感じる熱い射精を無理矢理に押さえ込む。先端の小孔からじわりと、多量の透明にしたたりが溢れ出し、それが床に向かって垂れ落ちる寸前、美佐子が舌先ですくい取った。

細い糸を引く、男の濃い匂いを放つその粘液を、彼女は味わいながら汚れた唇で囁く。

「見て、そこで見ていて……」

美佐子が、平尾の目前に立ち上がり、後ろの事務机によりかかった。

欲望に猛る美佐子の瞳。

その瞳で、彼女は平尾をまっすぐに見詰めながら、スカートを捲り上げ、そして腰をくねらせるようにしながら、下着をずりおろす。

上半身を着衣のままに、剥き出しになった裸の下半身は、まだ少女の細さを残す麻美のものと比較すると完全に成熟した女のものであった。

白い下腹部に映える黒い陰毛は、股間の奥から滲み出したものによってべっとり肌張りつき、艶やかに張り詰めた太股の狭間には、垂れ落ちるほどに愛液の雫をくわえ込んだ肉壁が見え隠れしている。

美佐子がゆっくりと太股を左右に開く。

よじれた股間の狭間から床に向かって長い一筋の銀色の糸が引かれ、その糸を絡め取るように、彼女は両手を股間に触れる。

美佐子の両手が、太股の内側の柔らかな肉をつかみ、歪めるようにして左右に押し分ける。

「見て……」

囁いた彼女が、平尾に向かって腰を突き出す。

欲情し充血した女陰が、太股の狭間で裂けるように開いて、その内側の造りまでをもさらけ出す。

わずかに口を開け、白濁しはじめている滴りを溢れさせる膣穴、歪みよじれた繊細な肉の壁、そしてその狭間から突き立つ肉の芽。

「うっ……」

美佐子の片手が上に向かって動き、見る者を驚かす程に乱暴な手つきで、揃えた二本の指を挿入する。

膣穴が押し開かれ愛液が手首を伝い落ちるなか、彼女は挿入した手を前後に動かしながら、己の欲情に猛った女陰を騷りはじめる。手が動く度に秘肉が盛り上がり、蠢く。

「うう……ああ……」

半開きとなった唇から漏れる喘ぎ声を押さえつける彼女の瞳は、深く顰められているが、その視線は決して平尾から離れようとはしない。

「ああ……ああ！」

美佐子の手の動きが早まるにつれ、漏れる快樂の聲が高まる。

もどかしげによじれ始めた太股の狭間で、膣穴を犯している手のあいた指が、肉壁の上端で突き立っている陰核に触れ、強く押しつぶすように愛撫を始めたとき、彼女の喘ぎの聲が本格的なものになった。

淫らな、見せ付けるようなマスターベーションの快樂に喘ぐ彼女の姿に、平尾が一步近寄った

とき、彼女がぐるりと身体を回して、背を向ける。

まだ事務ノートが広げられたままの机の上に、美佐子は上半身を倒して、尻を彼に向けて大きく突き出した。

平尾が、快感に揺れる彼女の腰を両手でつかんだ時、膣穴から抜き出した愛液まみれの手で彼女は勃起した陰茎に触れ、愛液と、そして平尾が滲ませている粘液とをそこに塗り付けていく。

「来て……」

囁いた美佐子が、膝で曲げた片方の脚を持ち上げて、豊かな尻肉の狭間を更に大きく開く。

再び自分の手で膣穴を嬲りはじめた彼女の、もう一つの窄まりに、平尾が愛液に濡れた亀頭を寄せていく。

そこは、膣穴の内側をかき回すように弄っている美佐子の手の動きによって、淫らに蠢いている。よじれる無数の皺によって形成された小孔に、赤黒く張り詰めた亀頭が触れる。

「ああ……！ 早く、お願い」

待ち切れぬ美佐子が平尾を求め、そして、欲望の猛りによる激しい勢いで、彼の下腹部が彼女の尻を大きく歪ませたとき、昼下がりの保健室の中に、二人の上げた重い快樂の音が響いた。

\*

平尾の住むワンルームマンションは麻美の通う高校から、私鉄電車で五駅目の住宅街の中にあつた。

ようやくたどり着いたその七階建のマンションの前に立ち、麻美は腕時計に目をやる。六時十分過ぎであつた。不案内な場所に手書きの地図一枚でたどり着くには、思った以上の時間がかかつてしまったのだ。

彼女は部屋で待っているだろう平尾を思い、脅えを感じるが、どうする事も出来ない。

それに、これ以上遅れたりしたら……。

彼女は、足早に入口をガラス戸をくぐり、奥のエレベーターへと向かった。

平尾が幾度目の視線を、壁にかけられている時計に向けた時、ドアのチャイムが涼しい音を鳴らした。

部屋の中に響くチャイムを無視していると、それは一度止まった後に再び遠慮気味に鳴り、その数秒後、鍵をかけていないドアの取っ手がゆっくりと回った。

ドアの隙間から恐々に覗きこんできたのは、やはり麻美であつた。部屋の向こう端に置かれたソファに座る平尾の姿を見た途端、目が伏せられた。

「どうした、入れよ」

平尾が言うと、ドアを開けた彼女が狭い玄関でうなだれる。

「……すいません、場所が解らなかったの……」

平尾は座ったまま、その言葉を無視するように命じる。

「鍵をかけて、こっちに来るんだ。これ以上オレを待たすな」

その声は静かであったが故に、彼女を脅えさせる。

「はい。ごめんなさい」

答えた麻美が背中を向け、シリンダ式のドアに鍵をかけてから、部屋に上がり込んでくる。

「あのベッドの横に置いてある紙袋を持ってくるんだ」

平尾が顎で、カーテンのかった窓の横に据えられたベッドを示す。

麻美が無言で従う。

紙袋は見かけ以上に重かった。彼女は一旦は片手で持とうとした袋を両手に持ち替え、平尾の座るソファアの前に運んできた。

「中身を出して、テーブルに並べろ」

屈み込みこんだ彼女が、ソファアの前に置かれている小さなガラステーブルに紙袋の中身を並べようと中を覗き込んだ。

その途端に手が止った。

驚きと恐怖、そして、どこかでそれを予想していながら敢えて考えようとはしなかった事を目前に突きつけられた者の表情を浮かべた麻美が、平尾を見る。

「どうだ？ お前の為の道具だよ、今日はそいつを一通り味わせてやるから……」

彼女の顔に浮かぶ表情を楽しむように平尾が言った。

「さあ、どうした、並べろよ。わざわざ用意してやったんだぜ」

麻美は一瞬だけ、哀願の瞳で彼を見るが、そこに浮んでいる表情を見て、再び視線を下げた。

彼女が紙袋の中から「道具」を取り出し、テーブルの上に並べていく。

銀色に輝く手錠、麻縄、グリセリン原液の瓶、浣腸器、肛門栓、金属性のクリップ、尻に赤いプラスチックの玉が付いた待ち針、先端にテフロン製の器具が付いたビニール管、性器用のバイブレーターと、今朝学校の保健室で強制されたマスターベーションの時に使用させられた肛門用のバイブレーター、そして一振りの鞭。

平尾は、自分の身体を嬲られる為の道具を並べていく彼女の姿を見下ろし、淫らな微笑みを浮かべた。

麻美が再び視線を上げた時、平尾が言った。

「手錠を填めろ」

麻美が、今テーブルの上に置いたばかりの手錠を取る。重く冷たいその感触と、自ら両手を拘

束する事に躊躇する。

平尾の強い声が背中に飛ぶ。

「早くしろ！」

ビクリと身体を震わせた彼女が、覚悟を決めたかのように、両手首に手錠をかけると、浅くかつたスチールの輪を平尾がつかみ、深く手首に食い込ませる。

ガチャリと冷たい金属音が響いた。

両手を拘束され、床にひざまづいた格好で、悲しみの瞳で自分を見る麻美のその姿に、平尾は、填められた手錠を繋ぐ鎖をつかみ、強く引き寄せる。

「あっ！」

彼の急な行動に驚く彼女の、開いた唇に平尾の唇が重なる。

貪るようなキス。細い肩と胸に食い込む平尾の手の指。

荒い息を吐いて、彼女を引き離れた平尾は、テーブルの上から取った麻縄を、再び床にひざまづいた彼女の手首の間に通した。

麻縄の端をつかみ、そのまま彼女を引きたてるように立たせ、天井に取り付けられている真新しい金具に、縄の端を通す。

ニヤリと笑った彼が、彼女の両手と天井の金具を繋いでいる麻縄を、強く下に向かって引いた。

「あっ！」

麻美が悲鳴を上げ、縄に引かれるがままに、両手を釣上げられた上げた格好で、爪先立ちとなる。

平尾が、ハッキリと恐怖の表情を浮べる彼女の頬に手を触れ、囁く。

「今日は何分遅れた？」

麻美が間近に迫る平尾から顔を背け、答える。

「じ、十分程です……。ああ、お願い許して……」

「これからは、絶対に遅れないようにしてやるよ……」

「ああ……」

麻美が嘆きの声を上げ、自由を奪われた身体をよじらせるなか、平尾の手が、彼女のセーラー服のボタンを外していく。

1分とかからずに彼女は、その裸の胸をさられ出させられた。白いブラジャーが床に落ち、セーラー服とブラウスは大きく広げられている。

平尾が、吊られた両腕と広げられた服の狭間で、恐怖の浅い息に小さく上下する二つの乳房を、両腕でゆつくりと揉み上げはじめる。

「あっ！」

昨夜縫い針によって貫かれた乳首をつままれたとき、彼女が小さく声を上げた。

「痛いかな？」

平尾が、傷の治り切っていない乳首を指の間で押しつぶすようにしながら、問う。

鈍い痛みと、それでも感じてしまう疼くような快感に、顔をしかめた麻美が低く答える。

「はい……」

「そうか……」

平尾が両方の乳首を更に強く捻り上げる。

「ああっ！ イヤッ」

苦痛に歯を噛み締める彼女の表情に、平尾の陰茎がスポンを押し上げる。

開いた彼女の唇を再び奪い、奥に挿し入れた舌尖で口内を舐め回した後、平尾が鞭を取り上げた。

「泣き叫べ……」

欲情を濃く滲ませる声で呟いた彼が、鞭を大きく振り上げる。

平尾が振り下ろした鞭は、麻美の薄く脂肪が乗った平たい腹部に向かって飛んだ。

鞭が肌の表面で弾ける時の鋭い音と、甲高い悲鳴が交差し、麻美の縦長の臍がその苦痛に踊る。

白い腹に一筋の赤い鞭の跡が刻まれる。

「数えろ」

平尾が命じ、再び鞭を振り上げる。

「い……いつかい……」

すすり泣きの声が混じった声でようやく言った麻美が、瞳を固く閉じる。

次の鞭は乳房に向けられていた。

黒い革製の鞭が、白い二つの隆起に絡み付く。

「ああっ！」

その手荒い愛撫に麻美が叫びを上げる。

「イヤッ、辛すぎます。お乳を打たれるなんて、お願いです……」

哀願する彼女が身体を揺らし、天井の金具が軋みの音を立てる。

昂ぶりの笑みを浮かべた平尾が、更に大きく鞭を持った腕を後ろに引いた。

「お願いっ！」

麻美の叫びに鞭音が重なり、そして悲鳴と変わった。

平尾が床に鞭を投げ出した時、全身の力を奪い取られたように彼女はぐったりとその身体を麻縄にゆだねていた。

すすり泣きに細かく震える彼女の腹部と乳房は、数本の赤い鞭跡が入り乱れて交差する惨状を



示していた。

鞭で煽られる事がようやく終わった今、打たれるうちに途中から痺れたようになってしまった。いた肌が、再び熱く燃えるような痛みを訴えはじめた。

平尾が微かに息を乱した声で言う。

「今度、遅れたら今の倍、鞭打ってやる……。その次はまたその倍だ、分かったか？」

麻美が頭をゆっくりと横に振り、囁きで答える。

「遅れません、決して……」

「それが賢明だな……」

平尾が両手で包み込むようにして、麻美の乳房に触れる。熱をもった乳房の柔らかさが手に感じられ、小振りなそれが手の中で柔らかく歪む。

押し出されるようにポツリと持ち上がっている乳首に、平尾が唇を寄せる。

「あ……」

薄れていく鞭の苦痛の中で、舐め上げられた乳首に感じる快感に彼女が小さく声を上げた。

平尾は唇で挟んだ乳首の、その先端を舌先でくすぐるようにしながら、彼女の両方の脇腹に手を軽く触れ、すっと下に向かって撫で下ろす。

脇腹のくすぐったい感触に、彼女の背筋にゾクリとしたものが走り、乳首の快感と混じり合う。

麻美が小さく息を吐く。

平尾の腕が彼女の背中に回り、天井から吊られたか細いその身体を抱き寄せた時、彼女の腕が反射的に彼に向かって動く。

麻縄によって止められた腕で、手錠が軽い金属の音を鳴らした。

平尾が彼女の耳に声を吹き込む。

「昼間、保健室で何をしたんだ？……」

「……え？」

平尾の片手が、彼女のスカートの中に差し込まれる。

「美佐子に何をさせられたんだ？」

「……道具で……」

囁くように答える彼女の太股に、平尾の手が触れた。

「バイブレーターか？」

「はい……」

「で、何をしたんだ？」

手が太股を軽くなで上げると、麻美が太股をよじらせる。

「一人で……、させられました……」

「感じたのか？」

手が彼女の股の付根に触れ、下着の薄い布越しにその奥の性器を愛撫しはじめる。

「あっ……」

指が下着の上から、その内部の肉の割れ目に沿ってすつとなぜる。

「感じたのか？」

平尾が重ねて問うと、彼女が小声で答える。

「……はい……」

指が彼女の性器の形を確かめるように、そのカーブに沿って這い昇り、下着の中に潜り込む。ざらざらとした陰毛の感触を味わった後、更にその奥に入り込んでいく。

「イッたのか？」

指が、既に熱く湿ったかのようになっている粘膜の感触を探り当てる。肉壁をかき分け、浅く潜り込んでいく。

「ああ……。はい……」

「はい？ どうした」

平尾の指が、はつきりとぬめりを滲ませている肉鏢を愛撫し、その狭間で息づく陰核に触れる。

「うう……。は、はい……。イキました……」

彼女の太股が、平尾の手を挟み込んでよじり合わずように動く。顎が上り、半開きとなって熱い息を漏らす唇から、桜色をした舌先が覗く。

平尾が突然叫ぶ。

「お前は淫らでイヤらしい牝犬だっ！」

麻美の膣穴に潜り込んでいる指先が、急角度で曲がり、爪を膣の内部に突き立てながら、そのまま引き出される。

「あっ！」

その急な苦痛に彼女が絶叫し、全身を跳ね上げるように揺らす。天井の金具が軋みの音を上げ、平尾が言った。

「さあ、お楽しみのはじまりだ」

以下、次回へ